社会科と総合学習の時間をリンクさせた開発教育／国際理解教育の実践
社会科「ともに生きる地球」＋　総合学習の時間「ワールドツアーへＧＯ！！」

大坪恭子　川坂俊一

期間　平成17年9月～18年3月
時間　社会科１６時間＋総合学習の時間２４時間（募金活動の時間も含めて）
対象　6年生　48人

学習の流れ

①総合学習15時間　9月～10月　学年合同授業

各国の紹介とグループ分け	１時間
グループごとの調べ学習や調理	10時間
ポスターセッションの練習	２時間
グループの発表	２時間

総合学習の時間に、子ども達から世界のことを知りたいという意見が多くでた。そこで、世界の色々な国について調べ学習を行った。その際、「社会の歴史の学習が終わると、日本とつながりの深い国について勉強するけどどうする？」という質問を投げかけると、「だったら、私たちのあまり知らない国について調べようかな。」という答えがちらほらと聞こえたので、グループごとのポスターセッションを前提に、開発途上国を調べることを勧めた。

調べやすいと思われる開発途上国の国々を10カ国ピックアップして子ども達に提示した。10グループに分かれての調べ学習。問題は、開発途上国についての資料が少ないこと。そこで、特徴（観光・貧困・国の政策など）のある国々を紹介した。子ども達に紹介した国々は、グアテマラ・エジプト・モルジブ・ブルガリア・ニジェール・マラウイ・ケニア・コスタリカ・ブータン・パプアニューギニア。グアテマラ・エジプト・モルジブ・ブルガリアは、観光。ニジェール・マラウイ・ケニアは貧困。コスタリカ・ブータンは国の政策。パプアニューギニアは、地球最後の秘境ということで、子ども達には紹介した。

子ども達は、その国の食べ物、子ども達の生活の様子や遊び、また識字率や乳児生存率などに興味をもち、インターネットで調べた情報などを頼りに、内容を模造紙3枚ほどにまとめていった。食べ物に関しては、各国の主食や飲み物などを家庭科室を利用して調理した。

開発途上国の主食や飲み物の味気なさや、乳児死亡率の高さ、識字率の低さに子ども達は驚きを覚えていた。各グループの発表は、それぞれの国に特徴があるため、初めて知る知識も多く、おもしろかった。そして、保護者にも発表を聞いてもらいたいということで、授業参観日に、体育館で各グループのポスターセッションを行った。各グループ、それぞれの国の主食や飲み物などを保護者にふるまっていたが、子ども以上に保護者の食べものに対しての味気なさの反応は大きいように見えた。

各国の情報源として、クロスロードや地球の歩き方などの本の他に、アマゾンで調べた各国に関係ありそうな本を何冊か用意した。ただ、6 年生には難しすぎる本が多く、一番よく利用されたのは、クロスロードだった。次に、各国の国旗の意味などをしらべるのに、地球の歩き方がよく利用された。

②社会科 15 時　11 月～12 月　クラスごと授業

総合学習での国際理解教育の学習は、いったん終了となったが、総合学習で学んだことを生かして、社会科の「ともに生きる地球」の単元で国際理解の学習をしていくこととなった。研究発表用の指導案を参考にしていただきたい。

③総合学習９時間（募金活動の時間も含めて）１月～３月　学年合同授業
募金活動　７時間
バザー　　２時間

社会科の授業で、「今、私たちにできること」を考えた。そして、貧しい国の子ども達の役にたてるのであれば、募金を集めて送金したいという意見が両クラスから出た。そこで実際にどうすればいいのかを総合学習の時間を利用して学年全体で話しあった。最初、子ども達はどのように募金を集めればいいのか、集めた募金を誰にどのように送金すればよいのか分からなかった。そのため、募金の集め方や募金の送金の仕方から考えていった。

そして色々と考えた結果、募金は（１）校門の前（２）駅（３）夏島フェアー（学習発表会みたいなもの）でバザーを開く　の３つ活動から募金を集めることにした。また、募金の送金先は、自分たちの募金が実際に使われる様子を知りたいということで、社会科の授業で２組のゲストティーチャーに来ていただいた先生の紹介で、カンボジアのＮＧＯ団体（国際人権ネットワーク　代表　緒方さん）に寄付することにした。

募金活動を行うにあたって、駅には、事前に許可を取った。小学生がするのであればということで、許可を頂いた。また、銀行で募金専用の口座を作り、毎回の募金活動の後、入金し記録を取った。

２月の寒い時期、校門の前での募金は、学校始業前の 20 分ほどを１週間続けて行った。駅の募金は夕方に１時間ほどを４回と活動報告のためのビラ配りを２回。バザーは夏島フェアー終了後に２時間ほど行った。それぞれの募金活動では、「カンボジアの恵まれない子どもたちのために募金をお願いします」のたれまく（４枚の模造紙をつなぎ合わせて作製した）を掲げ、またＢ５の紙に自分たちで調べた「貧しい国の子どもの現状」と「100 円あればできること」を両面に載せたビラを配った。

募金活動は、小学生が大きな声を出して一生懸命していることもあってか、地域の方々も温かい目で活動を見守ってくれたが、たまに文句を言ってくる大人や酔っ払ってからんでくる大人もいるので、注意が必要。

子ども達が交代で町に立ち、大声をはりあげて町の人達にお願いした募金活動と 2 時間ほどのバザーで、19 万円程のお金が集まった。教師が予想をしていた額をはるかに超える額が集まったので、募金活動中に町の人々がどのような気持ちで募金をしてくださったのかを、さりげなく聞いてみた。すると、「同じくらいの子どもを持つ親として、世界の子どものためになるなら。」「たったの 100 円で貧しい子どもが何人か救えるなら、気持ちだけ募金した。」「募金するほうがありがたい気持ちになった」などの話が聞けた。

そして、ＮＧＯの緒方さんが２月後半にカンボジアに行く際に、子ども達の寄せ書き、募金の 19 万円とバザーで売れ残った鉛筆を託した。

３月初旬。緒方さんが帰国した時に、現地に届いた寄せ書き、募金、鉛筆を写真に取ったものを学校まで送ってくれた。

④社会科１時間　３月９日　学年合同授業

１週間後に卒業式を控えての社会科最後の授業。緒方さんから送られてきた写真を子どもたちに見せると、自分たちの活動の実った成果が実際に見られ、感動のあまり泣き出してしまう子どもたくさんいた。

授業は、①カンボジアの希望小学校の児童が書いた手紙を読む

②活動を振り返っての感想

③「募金するほうがありがたい気持ちになった」という大人の意見はどういうことか

④小学校を卒業した後の自分ができること、10年後の自分ができること

の４点を子ども達と話しあった。

カンボジアの子どもの手紙はクメール語で書かれてあったので、クメール語を調べて何とか訳したが、本当に訳があっているかは分からない。薬を買ってもらえてうれしいなどの内容が書かれてあったと思われる。

授業では、③「募金するほうがありがたい気持ちになった」という大人の意見はどういうことかについて、みんなで考えた。子どもたちは、「カンボジアの子どもたちに募金して、向こうの子ども達からありがとうといわれて、こっちこそ、こんな気持ちにさせてもらって、ありがとうという気持ちになった。それと同じような気持ちになったのではないか。」などの意見が出た。

そして④の「これからの自分がきること」では、「中学生になっても募金活動を続けたい。」や「将来は、青年海外協力隊員になって、発展途上国のために何かしたい。」などの意見が出た。

実践を通してのまとめ

開発途上国の現状を調べ、日本が世界の国々と友好関係を築いていく必要性に気付き、貧困を通して同年代の子ども達のおかれている世界の今を知ることで国際理解のみならず、国際援助や国際協力についても興味関心を持つ子供が増えた。小学校６年生で、できることは限られていたが、それでも今の自分達にできることを実際に社会に出て行ったことで、子ども達は国際理解、国際援助、国際協力の大切さをより身近に感じたものと思われる。

開発途上国を知り、貧困問題を知り、実際に募金活動をして、社会や外国と直接関わった経験は子供達にとってとても印象深い体験になったようだ。最後の社会科の授業で子ども達に書かせた感想文には、これからも募金活動などを通して、国際援助や国際協力の分野で活躍したいと書かれてある作文が多数あったし、具体的に青年海外協力隊に行くことが自分の将来の夢になったという子も、３人ほどいた。

また、地域での募金活動では、まさか19万円もの募金が集まるとは夢にも思わず、国際援助や国際協力に興味のある大人が教師の想像以上に多くいることが知れてよかったと思う。

カンボジア・希望小学校の子供から

ありがとうの手紙

横須賀・夏島小6年生に募金のお礼

横須賀市立夏島小（鈴木貴代美校長）の6年生が、「ともに生きる地球」をテーマに学習、2月に募金活動で集めた19万円余をカンボジアに送った。同国の小学校から「ありがとう。薬箱を買います」と感謝をこめた手紙と写真が届き、9日の授業で報告された。

世界の貧困学び 19万2801円を贈る

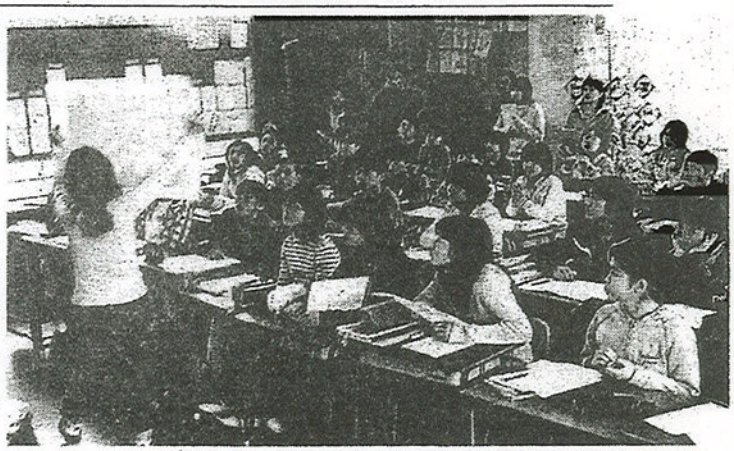
6年生48人は社会科で「世界の貧困」を勉強した。カンボジアを訪れた教師を招き、乏しい教育環境を知った。2月に4日間、学校前と京急追浜駅前で「カンボジアの子供たちに募金を」と呼びかけた。募金は19万2801円に達し、寄せ書きとエンピツを添え、NGO（非政府組織）の緒方由美子さん(57)に託した。4日に帰国した緒方さんが、手紙と写真を送ってきた。

「ありがとう」と募金への感謝を表す「希望小」の子供たち

募金を受けたのは「希望小」。プノンペンから車で6時間ほどのアンコールワット遺跡群の中にある。緒方さんは「親が戦争や地雷で死傷した子供たちのための学校で、1～3年生約300人がトタン屋根の教室で学んでいる」と話す。

授業で大坪恭子教諭が「みんなの活動が実ったよ」と写真を披露。「ありがとう」と書かれた紙を掲げる「希望小」の子供たちの笑顔があふれていた。エンピツを握る子も。クメール語の手紙は、青年海外協力隊の経験がある川坂俊一教諭(31)が翻訳した。「薬箱を買い、事故で骨折した子の入院費に使う」「エンピツ、ありがとう」などとあった。

笠間拓哉君(12)は「いろんな体験ができ、僕たちこそ、ありがとうの言葉を送りたい」と感想を発表した。大坪教諭は「同じ地球で教育環境に格差があると知り、給食を残さないようになった」と募金体験を振り返った。【網谷利一郎、写真も】



大坪恭子教諭（左端）が掲げるカンボジアからの写真を見る6年生

「のらぼう菜」出荷始まる

川崎

幻の古代野菜「のらぼう菜」の出荷が、川崎市多摩区で始まり人気を集めている。市内では同区菅地区の限定栽培。早春の味を求める市民に飛ぶように売れている。

も、のらぼう菜が栽培されている

は鎌倉時代と言われ、「野良坊菜」とも書く。野原で一休みした僧侶が、小鳥が食べているを見つけ、食べてみると美味だった。改良を重ねながら育て、今ののらぼう菜になったと伝えられる。

茎は甘く、葉はややほろ苦い。無農薬で栽培さ

地元の農業、五島健守さん(68)は、「昔はのらぼう菜から油を作った。飢饉の時はのらぼう菜で飢えをしのいだという。川崎独自の味を伝えたい」と話す。

収穫は4月まで。JAセレサ川崎菅支店（同区菅2）前の直売所などで販売されているが、同直売所では午前11時ごろには完売するという。【広瀬登、写真も】

日月書道会が11万3400円寄託

いと、2月上旬の日月書展と同展の授賞式で集めた募金11万3400円を

定年後や余暇に料理はいかが――。東京ガスキッチンランド川崎は、初めて料理に挑戦する男性を対象に、3回で和洋中の基礎を学べる料理教室「男だけの厨房（ちゅうぼう）」を初めて開催する。

4月15日は中国料理の基礎で、ご飯の炊き方をはじめ麻婆豆腐（マーボードウフ）や卵スープ▽西洋料理（5月20日）では、チキンカレー、ベーコンとトマトのサラダなどの作り方▽和食（6月17日）では、天ぷら、キュウリなどのわさびマヨネーズあえ、しじみ汁など基礎を習う。「包丁の使い方から調味料の計量まで分かりやすく紹介します」と担当者。時間は3回とも午前10時半か

現場から

連載ものや基地問題などを取り上げた記事には〝ワッペン〟というカットデザインが付いているが、ある読者から「付いていない日があったり、同じ日に掲載された同じような内容の記事の一方には付いているが、なぜもう一方の記事はこの場所に掲載されていないのか」と紙面としての統一性に欠けているという指

〝ワッペン〟

が　こ　て　る　ペ　を　そ　ペ　日　の　な　優　応　ら　た　文